

# 名大医学部学友時報 2017 7

## 目次

1. 教授就任	粕谷 英樹 …………… (1)	6. 基礎医学セミナー受賞者の言葉	
2. 緑陰随想	坂本 純一 …………… (3)	鷺見英里子 …………… (9)	
	河野 弘 …………… (5)	7. 暑中見舞	…………… (10)
	金岡 祐次 …………… (6)	8. 人生山あり谷あり	井口 昭久 …………… (14)
	久留 聡 …………… (6)	9. ご寄稿のお願い	…………… (14)
	鈴木 賢司 …………… (7)	10. 学友大会ご案内	…………… (16)
3. クラス会だより	卒後51年目のクラス会 … (8)	11. 編集後記	…………… (16)
4. 支部だより	尾西支部総会 …………… (8)		
5. 第26回 基礎医学セミナー研究発表会 表彰式	…………… (9)		

## 教授就任

総合管理医学講座 国際医学教育学 教授 <sup>かすや ひでき</sup> 粕谷 英樹



## 〈略歴〉

昭和51年4月 東海中学生徒会長  
平成元年3月 第22回全医体運営委員長  
平成2年3月 愛知医科大学医学部医学科 卒業  
平成2年4月 名古屋聖霊会聖霊病院 外科医師  
平成7年7月 名古屋第二赤十字病院 移植外科医師  
平成12年3月 名古屋大学大学院医学系研究科博士課程 修了  
平成12年4月 米国ハーバード大学医学部 外科 博士研究員  
平成16年4月 名古屋大学大学院医学系研究科 消化器外科学講座 非常勤講師  
平成21年4月 名古屋大学大学院医学系研究科 国際交流室 准教授  
平成22年2月 ICMT(米国 Baylor college of Medicine 内) 癌免疫治療学 教授  
平成22年10月 Fellow of American College of Surgeons (FACS)  
平成29年6月 名古屋大学大学院医学系研究科 国際医学教育学 教授

## 〈業績〉

1. Tan G, Kasuya H, Sahin TT, Yamamura K, Wu Z, et al. Combination therapy of oncolytic herpes simplex virus HF10 and bevacizumab against experimental model of human breast carcinoma xenograft. Int J Cancer. 2015 Apr 1;136(7):1718-30.
2. Kasuya H, Kodera Y, Nakao A, Yamamura K, Gewen T, et al. Phase I Dose-escalation Clinical Trial of HF10 Oncolytic Herpes Virus in 17 Japanese Patients with Advanced Cancer. Hepatogastroenterology. 2014 May;61(131):599-605.
3. Yamamura K, Kasuya H, Sahin TT, Tan G, Hotta Y, et al. Combination treatment of human pancreatic cancer xenograft models with the epidermal growth factor receptor tyrosine kinase inhibitor erlotinib and oncolytic herpes simplex virus HF10. Ann Surg Oncol. 2014 Feb;21(2):691-8.
4. Kasuya H, Nishiyama Y, Nomoto S, Goshima F, Takeda S, et al. Suitability of a US3-inactivated HSV mutant (L1BR1) as an oncolytic virus for pancreatic cancer therapy. Cancer Gene Ther. 2007 Jun;14(6):533-42.
5. Kasuya H, Pawlik TM, Mullen JT, Donahue JM, Nakamura H, et al. Selectivity of an oncolytic herpes simplex virus for cells expressing the DF3/MUC1 antigen. Cancer Res. 2004 Apr 1;64(7):2561-7.

この度、平成29年6月1日付けで名古屋大学大学院医学系研究科 総合医学専攻の教授職を拝命いたしました。また、合わせて7月1日より総合管理医学講座 国際医学教育学分野の教授職を授かりました事を謹んでご報告させていただきます。学友会の皆様には紙面をお借りして、ご挨拶申し上げます。

私は予てより国際連携室長、癌免疫治療研究室長としてその運営に当たって参りました。国際関連では学部から大学院まで点ではなく線で結ばれた体系化された医学英語教育を展開し、学部ではオープンキャンパス、入学

時オリエンテーションから、基礎セミナーA、医学入門の英語化授業、4年生次の医学英語、PBL英語シナリオ、国際的視野の開発、派遣実習前特別講義、海外提携校での臨床派遣実習を担当し、鶴舞キャンパスと大幸キャンパスで毎週2回低学年と高学年に分けた医学英語セミナーを開講してきました。低学年から高学年まで体系化された教育を受けた学生の2割強が海外提携校での臨床実習を経験し、この割合は今後も増加していく物と思われます。また、彼らの卒後の要求に応えるべく大学院での国際共同教育としてJoint Degree Programを展開し学部から大学院まで一貫した国際医学教育プログラムを展開しています。教室の研究テーマとしては世界のTop 100大学の医学部の学部および大学院教育システムの質的研究を広く行い、国際的に活躍する優れた臨床医学研究者、基礎医学研究者、医学教育研究者を育成し、国際競争力の高い研究大学として相応しい医学教育プログラムを開発する事を研究テーマとしています。

私は東海中学、東海高校を経て愛知医科大学に進み、聖霊会聖霊病院での1年間のローテート研修を経て、当時の名古屋大学医学部第二外科教室へ入局いたしました。入局後派遣された名古屋第二赤十字病院では内田和治先生のご指導の下、腎移植にも携わりました。その後、名古屋大学医学系研究科の大学院生として帰局し中尾昭公先生と西山幸廣先生のご指導の下、第二外科教室を主科、ウイルス学教室を副科として研究生活を送りました。大学院生時代の研究テーマは腫瘍溶解性ウイルスであり、大学院修了後は中尾昭公先生からご推薦頂き、この腫瘍溶解性ウイルスの研究で有名であったハーバード大学MGH外科学教室のProf. Kenneth K. Tanabeの所で博士研究員として働く機会を与えて頂きました。約3年半のポストン生活を経て中尾昭公先生より腫瘍溶解性ウイルスの臨床研究を行う事になったからすぐに帰国するようにと連絡があり、帰国後は腫瘍溶解性単純ヘルペスウイルスHF10を使用した臨床研究の遂行に邁進する日々を過ごしました。帰国後約4年が経過した頃、国際交流室の小林孝明先生が免疫機能制御学寄付講座の教授になられるのを機に国際交流室講師職の公募があり、以前から興味があった学部生教育、海外提携校との連携に自分の考えを持って携わることが出来る機会であると考え中尾昭公先生にご相談したところ、当初は今後の臨床研究の事を考え難色を示されましたが、最後は私の希望をお認め頂き平成19年から腫瘍性研究とともに国際関連の職務に携わっております。

本教室の活動の前身は伊藤勝基先生が開設された国際交流室を起源とします。伊藤勝基先生は開設当時から学部生の医学英語教育の一環として海外派遣臨床実習に力を入れられ教育色の強い活動を展開しておられました。その当時から名古屋大学医学部の国際化は日本の医学部をリードし、その提携校の秀逸さから羨望を受ける存在でありました。しかし、ここ数年の国際化の流れは以前にも増して顕著となり日本のほとんどの医学部が教育、研究において積極的な国際化の取り組みを行うようになってきています。そうした中で名古屋大学医学部も後塵を拝する事にならない様、組織強化に努めていく必要があります。ここ数年の大学教育・附属病院の国際化は大きな変革を求められています。学部におけるいわゆる2023年問題を発端として医学教育にグローバルスタンダード導入の必要性が問われ、大学院制度では、文科省の方針転換に追随する形で、海外の大学との国際共同教育を進めるためのジョイントディグリープログラムが発足しました。また、以前と比して大学のランキング評価が重要視されるようになり、評価項目としての国際共同研究の数と質が問題視されるようになってきています。

附属病院においても国際化の流れは加速しており、inbound、outboundともに早急な対応が望まれています。本教室は、この加速する国際化の大きな変革の流れの中で関係講座と協力し広く情報収集を行い、研究対象を国内外に広げ、変化する社会の要求に相応し、国内外の医学部をリードする指導的立場の国際展開を進めて行かなければならないと思っております。

最後となりましたが、これまでご指導頂いた総長、研究科長はじめ、諸先生方、スタッフの皆様深く感謝申し上げます。学友会の皆様、古巣である消化器外科同門会の皆様には益々のご指導、ご鞭撻の程何卒宜しくお願い申し上げます。

## 教授就任インタビュー

—— 教授に就任された心境と抱負をお聞かせ下さい。

名古屋大学の医学部の国際化をさらに進めていき、名古屋大学が日本の医学部の中で国際化のリーダーシップをとれるようにしていきたいと思っております。

■■■

—— 国際連携室の概要をお聞かせ下さい。

国際連携室は、主に医学部の国際化を担当しております。具体的には、1年次の医学入門の英語化、基礎セミナーAや、4年次の医学英語、PBLの英語のシナリオ、6年次の派遣実習前の授業などです。また、鶴舞キャンパスと大幸キャンパスで週に2回、低学年用と高学年用に分けた英語セミナーを開講しています。当教室はこれらを通して、低学年から高学年まで一貫した、体系化された英語教育を行うことを目指しています。

また、大学間海外の大学との共同研究や共同教育をはじめとした連携も行っています。我々は世界的にレベルが高い医学部や大学院の教育システムを研究し、名古屋大学の教育システムに反映して本学の競争力を高めたいと考えております。

■■■

—— 今の道に進まれたきっかけ。

小学5年生の時、父がアメリカのコロンビア大学に留学し、家族でついていきました。現地では研究者として働く父の姿や、学業に励む学生の姿に感銘を受け、帰国して大きなカルチャーショックを受けました。そこから徐々に海外を意識し始め、ハーバード大学に留学しました。これらの経験を通して、海外での経験の有無によって考え方や視野に大きな違いが生じることを実感し、多くの学生に国際的視野をもってもらいたいと思ったのがきっかけです。

■■■

—— 現在、国際連携の分野で話題になっていることを教えて下さい。

現在海外でも日本でも注目されているトピックスとして、ジョイント・ディグリープログラムが挙げられます。国内でジョイント・ディグリープログラムを実施している大学は名古屋大学を含めて2校のみであり、名古屋大学はアデレード大学をはじめとした海外トップ大学との提携を行っており、この分野において日本の先駆的立場を担っているとと言えます。

■■■

—— 最後に、学生へのメッセージをお聞かせ下さい。

学生の皆さんには、名古屋大学医学部でしか受けられない英語教育をうまく利用し、国際的な人材となって本学を卒業していただきたいと思っております。

(インタビュー：平松 成美、杉浦 健太郎)